

Т. Плескач, викладач
Школа іноземних мов «Enjoy»

ПРО СПОСОБИ ФОРМУВАННЯ КОМУНІКАТИВНИХ КОМПЕТЕНЦІЙ У СТУДЕНТІВ ПРИ ВИВЧЕННІ ЯПОНСЬКОЇ МОВИ ПОЧАТКОВОГО РІВНЯ

Статтю присвячено дослідженню необхідності практичного набуття навичок спілкування та шляхам реалізації завдання формування комунікативних компетенцій у дорослих студентів та студентів підліткового віку при вивченні японської мови. Розглянуто чотири основні комунікативні види діяльності, що використовувались під час занять на початковому етапі вивчення японської мови та їх дієвість, особливо розмовних компетенцій, у формуванні комунікативних компетенцій студентів.

Ключові слова: комунікативні компетенції, навички спілкування, практичне використання набутих знань та вмінь.

T. Pleskach, teacher
Foreign language school “Enjoy”

THE WAYS OF DEVELOPING STUDENTS' COMMUNICATIVE COMPETENCE IN LEARNING JAPANESE AT ELEMENTARY LEVEL

The aim of this article is to research the necessity of practical developing communicative competences and the ways this aim can be reached by building adult and teenage Japanese learners' communicative competences at elementary level. Four main communicative types of activities used during the Elementary Japanese lessons and the ways they work are studied. The main attention is focused on developing students' communicative competences by building their speaking competences.

Key words: communicative competence, communication skills, developing communication skills in Japanese through practical activities.

О. Трофімова, магістрант
Цукубський університет, м. Цукуба, Японія

トロフィモワ・オクサーナ, 博士前期課程
筑波大学, 日本国つくば市

日本文化を学ぶ教材としての小噺の可能性

本研究の目的は、日本語の授業における小噺の教材としての利用可能性について論じることである。小噺とは、江戸時代に誕生した落語への導入として用いられる短い話であり、落語と同様に最後にオチが来るという特徴がある。本研究では、林家染雀の「たぬき」という小噺を取り上げ、小噺の理解には言語的知識だけではなく、文化的知識、具体的には、たぬきときつねに対して日本人が持っている一般的なイメージに関する知識が必要であることを、先行研究の比較により明らかにする。そして、このことを踏まえ、日本文化を学ぶ教材として小噺は有効であることを主張する。

キーワード：落語、小噺、教材、モチベーションの維持・向上

1. はじめに

近年、ウクライナでは日本およびアニメや漫画などの日本文化に対する興味が高まり、日本への留学や日本での就職を希望する者が増えるなど、日本語学習者が年々増加している。しかし、実際に日本語を勉強し始めると、学習を継続する者もいれば、モチベーションが下がり、諦めてしまう学習者が非常に多いのも事実である。モチベーションの低下を引き起こす主な要因は、想像以上に日本語が難しいことに加え、多くの授業の内容が単なる文法や試験に合格するための勉強であり、実際のコミュニケーションに役立つスキルの獲得に結びつかないからだと考えられる。また日本への留学の機会が極めて少なく、大学を卒業しても日本語が使える仕事がウクライナにはほとんどないことも無視できない要因である。

このような状況を打開するためには、学習者に楽しく日本語を学んでもらえるような授業をしなければならない。そして、日本語だけではなく、日本の文化や歴史を紹介し、その理解を深めることが重要である。すなわち、これまで知らなかった日本を学習者に紹介し、日本や日本文化はおもしろく、楽しいというイメージを持たせることが、モチベーションの向上に結びつくのではないかと考えられる。

この背景のもと、本研究は落語、特に小唄に注目し、その教材としての有効性を論じる。ウクライナの日本語教育現場では、落語はほとんど知られておらず、授業で利用している教師や、落語を研究している者は管見の限りない。また、授業では日本文化はほとんど扱われず、ほとんどの学習者が落語についてまったく知らないという状況である。したがって、日本の伝統的な文化のひとつである落語に焦点をあてる本研究は、ウクライナの日本語教育に対して、学習者たちのモチベーションを向上させるための新たな視座を与え得るものである。

以下では、まず落語の定義と分類を示す。次に、落語を用いた授業の先行研究を概観する。そして、小唄の教材としての有効性について分析し、導入の方法について考察する。

2. 落語の定義と分類

分析に先立って、落語の定義と分類を示しておく。落語とは、江戸時代に誕生し、現在まで伝承されている日本の伝統的な話芸である。笑い話というのが最も一般的なイメージだが、唄の最後に意外な結末である「オチ」、もしくは「サゲ」がつかうのが特徴である。歌舞伎などの他の伝統的な芸能と違い、舞台上で座布団の上に座りながら身振りや手振りで一人の演者が何役も演じる。舞台装置や衣装はなく、扇子と手ぬぐいを使い、聞き手が想像力を活かせるように唄を進める。

落語は、古典落語と新作落語の二つに大きく分けられる。古典落語は、江戸時代から昭和時代までの間に誕生し、一般庶民の生活を描写した唄である。多くの場合、作者が不明であり、多少昔の言葉が使われている。それに対し、新作落語は、戦後から現代にかけて作られている唄を指す。さらに、古典落語は、関西地方で作成され、大阪弁を使っている上方落語と、関東地方で誕生し、江戸弁を使っている江戸落語の二つに分けられる。本研究が注目する小唄とは、短い笑い話であり、落語の枕、すなわち演じる落語の演目に関連した話で、落語への導入として用いられるものである。

3. 先行研究

落語を実際に日本語教育の現場に取り入れている例として、酒井(2001)および酒井・山田(2016)が挙げられる。酒井は、日本語学習者に「楽しむ」ことを第一義として日本語を聞かせたい、その中でも日本の伝統的な話芸である「落語」を楽しむ経験をさせたい(酒井2001: 14)という考えのもと、落語家を招いた実践を行っている。嘶は、学習者にとって初めての体験であることを考慮し、宗教的な面から混乱を起こすようなものや、語彙の難しすぎるものなどは避けられた。そして、授業1コマをかけて落語の説明を行い、落語家を招いて学習者たちに三つの嘶を聞かせた。最後に行った学習者たちへのアンケートやインタビューからは、落語が、情動的な面からも文化的な面からも、日本語の勉強に非常に効果があることが示された。

しかし、落語は、上級者であっても理解することが難しい。そこで、酒井・山田(2016)は、落語への導入として小嘶に注目し、映像を繰り返し見たり、クイズに答えたりしながら学ぶことができるCALLプログラムを作成している。本研究は、酒井・山田(2016)の考えに共感を示しつつ、日本語学習者の文化と日本文化との違いが小嘶の理解を困難にしていることを明らかにする。そして、それゆえに、小嘶が日本文化の教材として有効であることを主張する。

4. 小嘶に見える文化の違い

4.1. 小嘶「たぬき」

小嘶に限らず、落語は、日本人ならそのおもしろさを理解することができるが、日本語学習者にとっては理解が難しく笑いのポイントが分からない場合が多い。その理由としては、普段使われていない語彙や難しい語彙がよく出てくるほか、もともと文化の違いが理解に大きく影響していると考えられる。例えば、林家染雀による「たぬき」という小嘶がある。人間がサイコロ博打(ギャンブル)をしているところを見たきつねとたぬきは、自分も参加したくなるが、動物なので仲間に入れてもらえない。そこで、きつねは人間に化け、葉っぱをお金に変化させ、人間をだましゲームに参加する。それを見たたぬきは、きつねと同じようにゲームに参加しようとするが、たぬきであることがばれて人間に殴られる。間抜けなたぬきは化けるのを忘れていた、というのが話のオチである。このオチは、日本人であれば問題なく理解できるだろうと思われる。しかし、ウクライナ人の日本語学習者にとっては容易に理解ができないと考えられる。その理由は、日本人とウクライナ人の持っているきつねとたぬきのイメージが、そもそも異なるからである。以下では、具体的に、どのようにイメージの違いがあるのかを見ていく。

4.2. 日本人のきつねとたぬきのイメージ

日本人が持っているきつねとたぬきのイメージに関する研究として、塚本(2014)が挙げられる。塚本(2014)は、13名の日本人大学生を対象に、きつねとたぬきの潜在的印象に関する調査を行った。具体的には、きつねとたぬきそれぞれに対して、頭がよい、もしくは頭が悪いというイメージがどれだけ強く潜在的に結びついているのかを調べるテストを行い、結果として、「たぬき—頭が悪い」「きつね—頭がよい」というイメージのほうが強いということを明らかにした。

すなわち、日本人にとって、たぬきは頭が悪い動物であり、「たぬき」の小噺の内容は問題なく理解できると考えられる。

4.3 ウクライナ人のきつねとたぬきのイメージ

まず、ウクライナ人のきつねについてのイメージを確認する。きつねが登場する昔話などの民間伝承の分析を行ったКрижко(2008)は、きつねはずる賢さ、うそ、恩知らず、へつらいを表すと述べている。また、Демедюк(2015)によると、きつねは自分より体が大きくて強い、または頭が悪い動物（例えば、オオカミ、クマ、ライオンなどの猛獣）を騙す。例として、『井戸でおぼれたライオン』という昔話が挙げられている。きつねは森にやってきた怖いライオンを追い払うために、ライオンに井戸の水に映った自分自身の姿と戦わせ、井戸の中に飛び込ませる。その一方で、自分より体が小さくて弱い動物（例えば、雄鶏、もぐら、イタチ）が相手の場合は、騙すよりも、むしろ騙されるほうが多い。別の昔話では、きつねは他の動物を騙そうと、「新しい法律により動物みんな仲良くしなければならぬ」と嘘をつく。しかし、賢い雄鶏が「もうすぐ犬がやって来る」と言うと、きつねは怖くなって逃げる。このように、ウクライナでは、きつねは普段ずる賢いが、たまには失敗もするというのが一般的なイメージである。

次に、たぬきに関しては、昔話などの伝承には出てこない。その理由としては、ウクライナには、たぬきがほとんど分布していないからだと考えられる。しかし、たぬきが登場するアニメがある。それは、1974年にソヴィエト連邦でLil-liane Mooreの“Little Racoon and the Thing in the Pool”という物語を元に、「ちびだぬき」という題名で放送されたアニメである。主人公の小さいたぬきは、非常にポジティブで、愛嬌があり、そしてかわいいキャラクターとして描かれている。

4.4 日本人とウクライナ人のきつねとたぬきのイメージの比較

ここまで挙げたきつねとたぬきのイメージをまとめると、次のようになる。

表1：塚本(2014)、およびКрижко(2008)とДемедюк(2015)におけるきつねとたぬきのイメージの比較

| | 日本 | ウクライナ |
|-----|-------------------------------|-----------------------------|
| きつね | ずるがしこい 化ける | ずるがしこい 化けない |
| たぬき | かわいい 頭が悪い よく失敗する 化ける | かわいい 親切 愛嬌がある 化けない |

表1から明らかなように、日本でもウクライナでもきつねのずる賢いというイメージは共通している。しかし、日本では化ける動物であるのに対し、ウクライナでは化けるというイメージはない。たぬきのイメージについての共通点としては、かわいいところであるが、違いのほうが多い。日本では、頭が悪く、間抜けなところがあり、よく失敗するというのが一般的なたぬきのイメージだが、ウ

ライナではかわいくやさしく愛嬌のあるキャラクターとして想像されており、非常にポジティブなイメージである。また、きつねと同じように、化けるというイメージは日本ではあるが、ウクライナではない。

つまり、4.1.で示した「たぬき」という小噺は、ウクライナ人の日本語学習者にとっては、たとえ語彙や文法が理解できたとしても、そのオチを理解することが困難であることが分かる。このことは、「たぬき」を理解するためには、自分たちが当たり前にもっているイメージと日本人が持っているイメージの違いを意識化しなければならないことを意味している。すなわち、小噺を使うことによって、語彙や文法だけではなく、文化に対する学びへと学習者を導くことができると考えられる。

4.5 実践方法

ウクライナで具体的にどのように落語を導入すればよいのかについては、授業の目標によって、いくつかの方法が考えられる。例えば、噺自体を楽しむことを目標とする場合は、オチの理解のために、動物のイメージの違いのような文化的側面を事前に学ぶ必要がある。一方、落語を通して日本文化を理解することを目標とする場合は、噺を聞かせた後に文化的側面に関する学習の機会が必要である。どちらの場合であっても、教師が一方的に説明するのではなく、グループでのディスカッションや自分たちで調べるなど、自ら気づく機会を与えることも可能である。また、きつねとたぬきは昔話によく登場し、性格もはっきり表れているため、昔話を読ませることによって学習者の理解を助けることも可能である。いずれにしても、既に述べたように、落語はウクライナの日本語学習者にとってまだ馴染みのないものである。そのため、十分な説明や解説が必要になると考えられる。

5. まとめ

本研究の目的は、ウクライナの日本語学習者のモチベーションの維持や向上のひとつの方法として、日本語の授業における落語の教材としての可能性を検討することであった。そのために、林家染雀の「たぬき」という小噺を取り上げ、日本とウクライナにおけるきつねとたぬきのイメージの違いがこの噺のオチの理解を困難にしていることを先行研究の比較により明らかにした。このことは、日本語学習者にとって、落語が、言葉の困難さだけではなく、日本の文化的知識がなければ楽しむことができないものであることを意味している。すなわち、日本文化を学ぶために落語を用いることが有効であることを示している。

もちろん、本研究が分析したのはほんの一例である。また実際にウクライナ人の学習者たちが小噺を通じて何を学ぶことができるのか、また、どのように授業をデザインするのが有効なのかについて、検討する必要がある。今後の課題としたい。

参考文献

(1) 酒井たか子(2001)「中上級日本語学習者が落語を通して学べるもの」『日本語教育方法研究会誌』第8巻第2号: 14-15.

(2) 酒井たか子・山田亨(2016)「落語・小噺を利用した日本語学習支援CALLプログラムの開発と試行」『筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集』第31号: 69-80.

(3) 塚本真紀(2014)「きつねとたぬきの潜在的印象」『尾道市立大学談話会会報』第5号、: 1-8.

(4) Демедюк М. Етнокультурна специфіка тваринних образів в українських народних казках // Народознавчі зошити. – 2015. – №2 (123). – С. 655-659.

(5) Крижко О.А. Образно-номінативна та оцінна характеристика фольклорних зоосемізмів української мови // Вісник Запорізького державного університету. Філологічні науки. – 2008. – № 1. – С. 111–118.

Стаття надійшла до редакції 31.03.17 р.

УДК 378

フィロノワ・ヴィクトリア、教師
タラス・シェフチェンコ記念キエフ国立大学、キエフ

キエフ国立大学の2年生のための中級準備コースのデザイン

本論の目的は、キエフ国立大学の2年生の後期の最初の8週間で、学生たちがウクライナの文化や社会について、基本的な情報を日本人の大学生に日本語で紹介・説明できるようになること。

キーワード: 日本語、教授法、話す技能。

1. コースの背景

キエフ国立大学の2年生は、前期（9月～1月）に初級レベルの授業（『みんなの日本語 初級Ⅰ&Ⅱ』）を終え、後期（2月～6月）から中級レベルの授業（『みんなの日本語 中級』）が始まる。

しかし、2年生は、勉強した文型や単語・表現を使って十分に話すことができない。その理由は、授業時間が少なく、既習文型や単語・表現を使って話す練習が十分に行われていないことだと考えられる。このため、2年生には、中級レベルの授業を始める前に、『みんなの日本語 初級Ⅰ&Ⅱ』と『みんなの日本語 中級』の「橋渡しの練習」が必要であると考えられる。

「橋渡しコース」では、1年生と2年生の前期で勉強した文型や単語を使って、自分で文を作って話す練習をさせたい。特に、内容的にまとまった話（2～3分のスピーチ）ができるような練習をさせたい。

2. コースの目的

① 本コースの目的は、キエフ国立大学の初中級レベルから中級レベルへの「橋渡しコース」を設計すること。

② 「橋渡しコース」の具体的な目標は、キエフ国立大学の2年生の後期の最初の8週間で、学生たちがウクライナの文化や社会について、基本的な情報を日本人の大学生に日本語で紹介・説明できるようになること